

「学徒出陣」の飛行機乗りと少年航空兵

藤原義信

野方一丁目

昭和十九年、私はジャワ島バンドンのアンデル飛行場に駐屯する教育飛行隊に整備兵として勤務していた。この教育飛行隊とは、操縦者に特別の攻撃訓練を行う隊である。

戦局はますます緊迫化して、その年の七月七日にサイパン島守備隊が潰滅、続いて八月にはグアム島守備隊が全滅した。「学徒出陣」による操縦者の一隊が、この教育飛行隊に転属してきたのはその頃である。詳しいことは兵には知らされなかったが、来るべきフィリピン方面の米軍機動部隊の攻撃を徹底的に叩く訓練と私たちは見ていた。

各大学の学帽を飛行帽に代えた彼らは、日々、爆撃の猛訓練に明け暮れた。指導教官が見守るピストの高度約二千五百メートルの上空に水平飛行をしてみると、にわか機首を下げ、急降下を始めると一気に地上目がけて突っ込んで行く。ハラハラするほど急降下してくると、こんどは思いっきり機首を上げて急上昇して、また水平飛行に戻る。その訓練だけを繰り返し行うのである。きっと、実戦では爆弾もろとも敵艦船に突っ込んで行くのだろう。そう思うと、彼らの顔をまともに見るのが辛かった。

「急降下に入り、ぐんぐん落ちて行くと次第に気が遠くなつて失神しそうになる。そのとき母の顔が浮かぶ。思わず操縦桿を引いて機首を立て直すのだが、操縦桿を引いたのは自分ではなく母のような気がした」と早稲田大学出身の彼はそう語った。彼らは陸軍少尉に任官していた。私たち兵は将校と気やすく口を利くことは、はばかられたが、彼らの方から親しげに私たちに声をかけてきた。屈託なく笑うようなとき、学生であった頃の面影が偲ばれた。

二週間に一回、彼らに外出が許可された。刀を下げ、革の長靴をはき将校服に正装して、整然と隊列を組んで衛門を出て行った。そして、バンドン市の空が夕焼けに染まる頃、彼らは日本の名歌や童謡、唱歌を合唱しながら衛門に通じる道を行進して帰ってきた。軍歌を歌うことは稀れであった。それは全く異例なことであった。軍歌以外の歌を公然と、しかも戦地の営外

で行進しながら歌うのは、軟弱であるばかりか士気低下のそしり免れず、願い出てもおそらく許されなはずである。しかし、そのように胸を張って歌えたのは、特攻学徒への部隊長のせめてものはなむけであったかも。やがては爆弾を抱いて突っ込んでゆく彼らのことを思いやると、私は、厳肅な気持ちにならざるを得なかった。

夕やけ小やけの 赤とんぼ
追われて見たのは いつの日か

外出日、私が衛兵勤務について衛門で立哨していると、「赤とんぼ」の歌の合唱が聞こえてきた。先頭に立って音頭を取っている彼は、ある音楽大学の出身者であった。私は一瞬、完全武装の衛兵であることを忘れて、幼い日の私に駆け戻っていた。彼らは、懐かしい祖国の歌に託してどんな思いを訴えようとしたか。彼ら自身の口から聞く機会は得ず、戦友の話からはその愛唱歌を知るのみであった。その幾曲かは次のとおりである。

「さくら」「月の砂漠」「荒城の月」「故郷の空」「証誠寺の狸ばやし」「故郷」「花嫁人形」「旅愁」などである。

半年間の特別訓練の教育が終わり、彼らはアンデル飛行場から飛び立って行った。どこへ行くのか、私たち整備兵は知らされず、彼らもまた黙して語らなかつた。ただ一言、「お世話にな

りました」と、愛機を整備してくれた整備兵に別れを告げた。それからの彼らの生死のほどは分からない。

戦争がなければ、大学を出て、社会人になって、家庭を持って、人並みに生きられる命を誰もが持っていたのに。

昭和十九年七月十八日、東条内閣総辞職、七月二二日小磯内閣成立、十月に大本営はフィリピン決戦の発動命令を出した。その頃、第二陣として少年航空兵の一隊がこの教育飛行隊に転属してきた。私たち整備兵はその童顔の一隊を会津白虎隊に見立てた。

「白虎隊が出てくるようではいよいよ……」と覚悟を新たにした。しかし、この少年兵君たち、実にのびのびとして明るかった。青りんごのように新鮮であった。

彼らは陸軍伍長で、私たち兵にとっては上官であったが、階級意識は軍務の他はなくなって、兄弟の間柄に近い情が出てきた。

急降下爆撃の猛訓練が終わったあと、飛行場の一角に車座になって、兄貴はよく弟をからかったりしたものだ。

「彼女がいたんだろう。女学生か」
「そんな者はおらん」

ムキになって否定すると、真っ赤になって下を向く者もいた。恋も知らず、十七や十八の歳で一生をこいつらは終えてしまふのかと思うと、不憫でならなかつた。しかし、それは私たち

の感傷であるのを裏付けるかのように彼らは潑刺としていた。

私の質問にこんなふうに応えた少年航空兵がいる。

「なぜ、志願したのか」

「国のためさ」

「体当り攻撃、覚悟をしているのか」

「そのときは突撃するだけだ」

「怖くはないのか」

「怖いよ、でも飛行機に乗ることが最高に楽しくてならないんだ」

少年がはばたいて行く空は無限である。無限のただ中を行く。敵機が現れない空であったなら、平和な空であったならば。

それは、また私たち整備兵にとっても幸せな空であったが、その願いを無視するかのように爆撃訓練は日ごと激しさを加えた。私と同じ東京出身の彼はその日、飛行中、不意に極度の睡眠に襲われた。操縦桿を意のままに動かせず、高度がぐんぐん落ちていった。ハッと気がつくと、やし林が目の前を覆ってきた。意識を持っていたのはそこまでである。やし林の上に不時着、というより半ば墜落したのであるが、彼は奇蹟的に助かった。野戦病院から退院した彼は、「地獄の入口まで行ってきまして」と笑っていた。

まだ十八歳の少年であった。淡々と悟ったようなその笑顔に私は複雑な気持ちになっていた。

彼らとも別れの時がきた。東京出身の彼は私の手を強く握って言った。

「いつか東京で会いましょう」

「うむ、きっと会おうな」

私は心の中で（死ぬなよ）と叫んでいた。

昭和二〇年四月、米軍が沖縄本土へ進攻を始めた頃であった。同年八月十五日正午「終戦の大詔」の玉音放送、はるか南の異郷の地にあつて、敗戦の真ただ中に置かれた私たちにはその後、あの少年たちが、どこでどうなったか、自分たちのことで精一杯で知る由もなかった。別れの日、滑走をする輸送機の窓に顔を擦りつけるばかりにして手をふり続ける面影だけが、私の胸の中に残っていた。